主論文の要約

論文題目	私立通信制高校サポート校生徒の移行過程に関する社会学的研究 ―高校中退経験者の学校経験および進路選択に着目して―
氏　　名	内田　康弘

1990 年代以降の日本社会では、不登校や高校中退経験などによって直線型の移行ルートから外れた、移行の危機に直面している若者に対して、再び学校教育を受ける機会や進路選択を保障し支援する、公教育と私教育の連携による新しい教育システム(以下、「公私連携型教育システム」)が増加・多様化している。本研究の目的は、なかでも高校中退経験を持つ私立通信制高校サポート校(以下、「サポート校」と表記する)生徒の移行過程に着目し、多様化する後期中等教育機関の一つに位置づくサポート校を経由した、「非直線型の移行」のプロセスとその構造を明らかにすることである。

本研究は二部構成で展開し、まず第一部(第 1 章～第 3 章)では、公的統計や先行研究、進学雑誌の分析から、「私立通信制高校サポート校の構造的特性」を描出する。次に第二部(第 4 章～第 8 章)では、「高校中退経験を持つサポート校生徒たちの移行過程」を、サポート校内部での生徒－生徒間および生徒－教員間の相互作用を相互作用に着目しながら描出する。そのため、研究方法としてエスノグラフィーを採用し、なかでも参加観察という手法を用いて、大都市圏にある大規模サポート校 X 学院 V 校へのフィールドワークによって得られたデータをもとに、高校中退経験を持つ生徒の学校経験から卒業後の進路選択に至るまで、一連の移行過程を描き出して分析・考察を行った。この一連の過程を通じて、高校中退経験によって自身への否定的な感情を持つ生徒たちが、サポート校内部での相互作用を通じてどのように自己アイデンティティの回復を行い、どのように新たな媒介的コミュニティを獲得しながら、大学進学に向けたスムーズな移行を達成していくのかという分析視角のもと、公私連携型教育システムとしてのサポート校の機能とその課題を考察した。

第 1 章では、先行研究の整理を通じて、高卒当然社会の現代日本における高校中退現象を、後期近代社会を生き抜く若年層の移行問題として捉える視点を導出し、それを経験した 10 代の高校生たちの「非直線型の移行」を支援する「場」としてのサポート校の役割を考察した。学校世界から労働市場へ移行が不安定化した状況下で、サポート校は通信制高校という公教育の側面と、民間教育施設という私教育の側面とを併せ持つ、公私連携型という制度的柔軟性を生かすことで、非主流の後期中等教育機関における主要ルートとして機能している構造を描出した。

第 2 章では、サポート校と制度的補完関係にある通信制高校の、中退経験者受け入れの推移と生徒像の実態を、各種統計資料や通史資料等のデータに基づきながら描き出した。その結果、1990 年代以降の通信制高校では、私立校を中心として「中退経験者の受け入れ」という役割が量的に大きな現象となること、2000 年代以降は主に「転編入学経験を持つ 15～17 歳生徒」たちの受け

皿として私立通信制高校が台頭し、高校中退経験を持つ若年層生徒の「非直線型の移行」を担う後期中等教育機関の一つとして、サポート校が機能している実態を導出した。

第 3 章では、高校中退経験を持つ 10 代生徒の「非直線型の移行」を担う民間教育施設としてサポート校が社会的に位置付けられてきた変遷の過程を示すとともに、進学支援雑誌の分析を通じて、1992 年度から 2012 年度の 20 年間で、施設数・生徒数がともに増加傾向にあることを明らかにした。また、サポート校には全日制高校に比較的類似した学校文化や学校行事が存在する一方、手厚い登校支援や学習支援などサポート校特有のカリキュラムが同時に存在しており、教育上の様々な「困難」を抱える生徒のニーズを集め、全国的に展開してきた傾向を描出した。

第 4 章では、本研究でエスノグラフィーを用いて調査を行うことの妥当性を検討したのち、調査校である X 学院 V 校の沿革に関して、カリキュラム面や教育環境面を中心に記述した。V 校では転編入学によって随時入学してくる生徒たちの流動性に合わせた教育実践が可能になるよう、そのカリキュラムおよび教室空間が出来得る限りの柔軟性を持って構成されており、まさに高校中退経験を持つ 10 代生徒たちの「非直線型の移行」を可能にする教育環境が整備されている実態を描出した。

第 5 章では、高校中退経験を持つ生徒が形成する、サポート内での多元的な友人関係のメカニズム及びその機能を論じた。V 校の生徒集団では、まず同質的な友人関係である「純粋な関係性」としての「日常的互恵関係」の形成が促進され、結束型の社会関係資本が蓄積されていた。さらに、各グループ間の境界を柔軟に往還する「制度的移植者」が基軸となり、通信制高校の学校生活に対する生存戦略として、各生徒が友人関係を「切り替え」ることで各グループの境界を超えた「戦略的互恵関係」が形成され、橋渡し型の社会関係資本が蓄積されていたことを明らかにした。

第 6 章では、生徒たちが転編入学後の生活世界である V 校への登校に際して「前籍校」の制服を着装する現象に着目し、彼・彼女たちはなぜ自ら前籍校の制服を着用するのか、その背景に存在する主観的意味世界とそうした行動が持つ機能を明らかにした。分析の結果、現代社会においては未だ「普通の高校生」であることへの強い価値規範の存在を明らかにするとともに、「学校制度からの逸脱者」としてのスティグマを付与されたサポート校生徒は、そうした社会的価値規範との相互作用のなか、前籍校の制服を着装することで「普通性」の獲得・補償を目指し、高校中退経験及び復帰後の学校世界を必死に生き抜く主体である事実を描出した。

第 7 章では、サポート校を経由した非直線型の大学進学行動の実態を、V 校での生徒－生徒間の相互作用および、生徒－スタッフ間の進路指導という構造的側面から明らかにした。その結果、前籍校という特性が、生徒間での相互作用を通じて、そのカテゴリーを問わず大学進学アスピレーションの(再)加熱を支える独自の資源として機能すること、また、スタッフは各生徒の前籍校の履歴現象効果を巧みに活用して志望大学のランクをそれぞれ調整し、進路資源と組み合わせながら生徒を皆「納得」させて大学進学へと導くことが導出された。さらに、そうした学校経験を経て大学合格を達成した生徒たちには、高校中退経験そのものを「成功物語」獲得のための進路

変更として積極的に捉え直す自己再定義過程があることを明らかにした。

第 8 章では、大学進学行動に関する生徒個人の主観的解釈に焦点を当て、大学進学アスピレーションの維持やその加熱過程を明らかにした。その結果、「高校中退キャリア」からの離脱を企図して V 校への転編入学を果たした生徒たちは、V 校で居場所空間・学習支援空間・大学進学支援空間という異なる 3 つの役割空間を獲得し、「自己再定義」を通じて大学進学キャリアへの復帰に対する能動性を確立していく様子を明らかにした。さらに、そうした大学進学行動は、生徒たちの主観のみならず、否定的なラベルを付与する当該社会の人々の主観に対しても、高校中退経験者に対して付与された否定的カテゴリーの「修正」を迫りうる実践である可能性を示唆した。

以上の分析を通じて、高校中退経験を持つ生徒にとってサポート校は、高校中退という同質的な経験を共通言語として用いながら生徒集団やスタッフとの相互作用が進行する「媒介的コミュニティ」であると同時に、そうした相互作用を通じて自己アイデンティティの回復が可能になる公共空間であることを指摘した。さらにこの知見を発展させ、公教育的側面と私教育的側面とが補完的に作用しながら「非直線型の移行」を可能にする、公私連携型教育システムとしてのサポート校は、後期近代社会において不安定な移行を余儀なくされる高校中退経験者に対してスムーズな移行を達成させる役割を果たす、重要な「サードプレイス」としての可能性を有する機能的側面に関して考察した。一方で、そうしたサポート校の機能が、高卒資格取得に対する平等化を拡大させたかのような印象を与えつつ、実際には高校中退経験を持つ若年層の不平等を一層拡大する「認識論的誤謬」を生み出す可能性に言及し、本研究における残された課題として指摘した。